

第5回 県立高等学校通学区域検討委員会 会議録

日 時：平成18年2月14日(火) 10:30～14:30

場 所：ホテル白鳥 本館1階 白鳥の間

会長挨拶

会 長

今回は松江市内の3校の校長先生に来ていただき率直な御意見を聞いた。3人の校長先生は、ほぼ一致して現状維持ということではなかったかと思う。ただ、その後の審議の中で、この審議会としては、規制の撤廃、現状維持、そして一部緩和、条件的修正という3つの考え方があっていいのではないかということになった。

諮問にもあったように、これからの高校生が自己実現するために、また高校の活性化のために、地域の実情も考慮しながら適切な通学区域のあり方を答申するという趣旨に沿いながら一定の方向性を出していただきたい。

私たちが行っている研修会で、かつて文科省の専門教育課におられた方に話をしてもらっている。その中で、人事異動で校長が自分の学校にほしい教職員を指名できるという制度を導入したが、最初はメリットであったことが実行する中でデメリットとなっていくという話があった。事はさように、そんなに簡単に改正できることではないと思う。熟慮に熟慮を重ねた上で、しかし勇気を持って判断しないといけないこともあるだろう。率直に意見をうかがって、それで方向性を出せたらと思っている。

議事

【本日の予定】

1. 協議内容

松江地区普通高校の通学区域について

2. 資料の確認

特になし

【議題1 松江地区普通科3高校の通学区域について】

会 長

今日は、松江3校の普通科の通学区域について、具体的に踏み込んだ議論をしていただくことにより、方向性を打ち出していきたい。前回の会議において、方向性としては大きく3つのパターンに分かれるのではないかという指摘があった。1つ目は現状維持、2つ目は撤廃、3つ目は緩和、すなわち現状維持しながら部分修正という3つの方向である。県民意識の調査でも、この3つを示して意見を求めたので、このような視点を持ちながら議論を進めていきたい。

委 員

松江市内の中学校長会で出た意見を紹介したい。かつて東高ができて、四中校区から1期生を送り出したことがある。その時はいろいろな住民の意見があって、大変な思いをして東

高へ行かせた。やはりそのいきさつを大事にしてほしいという意見がかなり出た。結論から言うと、校長会の意見としては現状維持だった。

前回の資料の中に、松江四中と湖東中の保護者あるいは生徒たちのアンケートが載っているが、これは一部修正しながら現状維持でという意見のあらわれだと思う。やはり現状維持というのが建前で、もしそれがよくないということになれば一部修正。その修正というのは、四中、湖東中あたりの校区の見直しということである。

委員

前回、用があって欠席して議事録を見せていただいたが、3つの高校が競い合って、それなりの成果を出していて特別弊害はないということであれば、基本的に現状を維持することにして、問題になっている地区を修正していくということでもいいと思う。ただ一つ腑に落ちないところがあるのでお聞かせいただきたい。

前回の話では、各学校で多様な生徒が入っている、分数計算ができないような子供もいる、その一方では進学実績などでいい成績をおさめているということだった。これはどういうメカニズムに基づくのか。一つの学校の中に多様な学生がいるけれども、大学進学というところから見ると結果としてそれなりの成果をおさめている。国公立大学の進学率は結構高い。その二つをつなぐメカニズムはどうなっているのか。

結果としていい結果を生んでいる、いい競い合いができていくということであれば、それはそれなりにいいと思うが、そのメカニズムがもう一つわからないので、それを教えていただければ非常にありがたい。

委員

一言で言ってこれは教員の情熱である。3校がいい意味で競い合って、お互いライバル視して子供の自己実現をするということで、これは全国まれに見るシステムだと思う。どの学校も夜8時になっても9時になっても明々と電気がついているというような状況の中で、お互いがしのぎを削ってやってきた。昼はそうやってライバル視するが、5時を過ぎると交流会で悩みを話しながら、お互い助け合ってやってきた。それが3校で多いときは700人以上の国公立大学の合格者を出してきた理由である。これが先日3校の校長先生方がそれぞれ訴えられた根底にある。

分数がわからない子供も入っているという問題だが、能力の低い子を粗末にしたことは一度もない。それなりにそれぞれ個々に指導する。例えば3校とも最後の進路決定の会議は、1週間大体徹夜である。一人の生徒に30分から40分ぐらいの時間をつぎ込んで、この子にどういう学校を勧めたらいいか話し合う。一人一人の子供の進路を、しかも全員で、性格の分析やらこの子にはどういう学校が向いてるか話し合うことが最後の合格率につながっているのではないかと思う。

そのような教員の努力の根底にあるのは、居住地によって進学先の高校が決まるという入試制度である。頑張らないとすぐ住所を移されるということで、3校がいい意味でしのぎを削ってきた。

委員

生徒一人一人について、どうやったらこの生徒の力を伸ばすことができるかと、全員で綿

密に検討をしゃって来たことが、ボトムアップにつながったと思う。

そのかわり教員も7時半から出かけた。そういう生徒を何とかしてやろうという気概が先生方の中にもあったし、生徒たちもそれにこたえてくれた。学校のそういう活気が高い大学合格率という形になったのではないかと思う。また、しのぎは削るけれども、他校の教員と一緒に教材研究や研究も非常にしていたように思う。

委員

生徒がいざ進学となったときに、先ほどから話に出ている志望校判定会議とか検討会議とかいうシステムを導入すれば、進学実績のようなものは上がるのではないかと思う。ところが、3年生の最後にある日突然、君はこういう学力だからこっちがいいとかあっちがいいと言っても、子供と先生との信頼関係がないとうまくいかない。最終的にはそれまでの3年間の人間関係、信頼関係が大事で、多くの先生が目で一人を見る形が学校にあるからこういう優れた結果が出てくる。それは最終的には先生方の教育への誇りとか自負心とかが高等学校の中にあっただからではないかと思う。

それと、習熟度的な、生徒の学力に応じて授業を組みかえていくという発想は、島根県が全国をリードしたと思っている。今のように習熟度編成をどんどんとりなさいという話がないときから、習熟度クラス間の入れかえを頻繁に行うとか、先生方の大変な御努力の中で進行していった。ほかの県は明らかにこの島根県のやり方をまねしようとしていると思う。生徒を育て上げるシステムとか、先生方の現場への誇りとか思いとか、そういうものが学習や部活動の裏づけになっていると思う。ほかの県では、こういうシステムを導入してもそれを運用する先生の方がなかなか追いつかないというのが正直なところではないか。

委員

今までの皆さん方の御意見としては、今のような形が望ましいということだと思う。少し離れたところから松江の方を見ていると、3校が切磋琢磨してやっておられるという感じは非常に受ける。だからこういう3校が競い合う形は望ましいという印象は持っている。

ただ、部分的に修正しないといけないところが、保護者や子供たちから出ているなら、それをある程度まとめて検討していく必要があるのではないか。

委員

3校が規制緩和という形になってくると、中学校側としての問題がたくさん起こってくる。まず一つは進路指導。例えばA校、B校、C校という普通高校があったときに、A校、はちょっと難しいなあ、B校も難しいなあ、それならC校にするかと、自然に学校間の格差をつけてしまうということになる。今はそれはない。その学校間の格差というのは、学校がつけるわけではなく自然についてくる。それが果たしていい結果を導くかどうか。自分は望んでいないC校へ行ったとすると、それはやはりやる気の問題にもつながってくると思う。今はそれがどの子にもやる気になってあらわれている。

それから、ある面では学校が荒れるかもしれないと思う。先ほどの普通高校の御努力、御尽力というのは非常によくわかる。ある高校の校長先生と話したとき言われたことは、小学校から中学校へ子供が入ってくる時、学力という点で考えると100からゼロという幅で入ってくる。ところが高校へ入るときには、ある高校では100から60かもしれない。専

門高校はどうだろうか。これは大変である。やはり努力をされて、今以上あるいは現状維持という状態を保っておられると思う。普通高校もやはり企業努力をされて頑張っておられる。それが崩れるということが果たしていいのかどうかと考える。だから、中学校側としては、規制緩和という言葉はよくわかるけれども、今の状態がベストだと思うし、一部修正ということも当然頭には入れないといけないとは思いますが、中学校にもたくさんの問題が起こってくるということは御理解をいただきたい。

委員

3校が今までやってきた中でマイナス点はどこであったかということも上げてみて、どこかに線を引いていかないといけないのではないかと。今の四中の問題がマイナス点として上がった。ほかにはどうなのか。例えば、最近志願倍率が県教委から発表され、3校あたりの定員はどうなのかというような心配も聞く。その辺から、保護者の立場、地域の方、いろんな外部から見て、今までやってきたこの20年ないし30年の中でのマイナス点もあげてみて、それを総合したものでどこに線を引くかというような議論が必要ではないか。

委員

高校に入学したときの学力がだんだん下がってきているという話があったが、普通高校に行く生徒だけではなくて、全般的に下がっているならば、中学校の3年間である程度のところまで達していないということではないかと思う。ではどうしてその学力が下がっているのか。その理由を最初にお聞きしたい。

会長

昨年1月に地元紙に掲載されてから、この学力問題が非常に大きくクローズアップされて、こうした通学区域の問題や大学進学率などの問題も絡んでいろいろと話題になっている。前回、県としても学力向上プロジェクトを立ち上げて専門的に追求しているというような報告もあったので、どこかお答えできる場所があったときに取り上げたい。

委員

どうして聞いたかということ、親としては子供たちの学力が下がっているということは感じていて、塾に行ったり家庭教師を頼んだりとかすると経済的負担がとて大きくなっていく。親の収入によって子供の学力に影響があるのはいいことではないと感じる。

3校が切磋琢磨しながらつくってきた歴史は文化にも通じるもので変えがたいと思うし、ここで変えてしまうと中学校に及ぼす影響はとて大きいという気がする。できるならばこのままでいいという気がする。ただ、問題となっている津田小学校や竹矢小学校のことはできたら方策を考えてほしいと思っている。

委員

岡山県には、自己推薦という、生徒が自分の意思で推薦入試を受けられる制度があるが、すごい倍率である。その枠は各学校の裁量だから、10%の枠の学校もあれば30%、40%の割合の学校もある。倍率とすれば30倍とか、もう一般入試の前哨戦のような意味合いの学校もある。逆に言うと、落ちて、またそこで人間太くなれという意味合いもあるので

はないか。だから、この学区の問題ともう一つは入試選抜そのものの問題もあるのではないかと思う。

委員

前回の松江3校の校長先生の話聞いて、先生方の御努力に本当に感動し、大変いい状態であるものを変更する必要はない、現状維持でいいと思うようになった。

少し気になったのは、今まではよかったが、5年、10年後については不安もあるというようなことを3校の校長先生が言われた。その不安とはどういうものなのかということいろいろ考えた。今回の検討、答申というのは、何年先を見通してというようなものではないのか。

事務局

時限的に、これからこの期間ということは想定していない。現段階でベターなもの、ベストに限りなく近いものを考えていただきたい。

委員

現段階を重く考えてということであるら、これでいいのではないか。余り先々のことをあだこうだと言って改悪することのないようにした方がいい。

委員

3校の校長が不安があると言ったのはどういうことかということ、この3校体制で進学でもすばらしい成果を上げてきたが、年々少しずつ下がってきているという現状である。これは島根県の学力低下問題と関連しているが、全国的にどこの県もどんどん受験指導をやり出したことによって、今までと同じように頑張っても成績が下がっていったというのが実情ではないか。それと、文科省自身も多少その責任があると思う。本当にゆとり重視の教育がよかったのかどうか。

したがって、この通学区の問題については変えることに反対だが、何かカンフル剤のようなものはないかと考えている。不安というのは、恐らくそういう、だんだん手詰まりになってきたということではないか。

委員

この会に参加させていただいたときには、撤廃ないしは大幅な緩和という考え方だったが、教育現場の話をしているという心配な面も出てきて考え方が変わってきた。ただ、先ほどから出ている学力の問題とか、競争心とかチャレンジ精神を持ってもらうとかいうことで、若干の緩和ぐらいは考えてみたらどうかと思う。

アンケート調査は、結果的には1対1対1ということだが、現状維持が3分の1で、あとの3分の2はやはり改革を求めているのではないかと思う、生徒も保護者も。北高の生徒だけは、すでに入学しているので現状でいいということではないかと思うが、全体的にはやはり何らかの改革を求めているのではないか。

それと、時代の変化に対応してある程度改革することが必要ではないかと思う。先ほど学校が荒れるという話もあったので、若干の緩和ではどうかという感じている。また、前回も

出ていたように、教員の異動ルールの見直し、理数科や東高の問題等々も検討して改革をすべきではないかと思う。

委員

現状維持ないしはある程度の規制緩和という方向で賛成であるが、後10年ぐらいまで見通した場合、松江市内の高校入学者数がどうなるのかということも少し考えていけないといけないのではないか。学級数がどんどん減っていく中で、これまでどおりの成果が得られるのか疑問に思うし、場合によっては3普通高校が維持できないような生徒数にまで落ち込むことも考えられるので、せめて10年ぐらいのスパンでは今後の見通しを持っていないといけないのではないか。

また先ほど出ていた津田、竹矢小学校の通学に関する問題もあるし、市内のドーナツ化というようなことも考えていけないのではないか。やはり、少なくとも今後10年ぐらいのスパンで生徒数の増減を考えておいた方がいいのではないか。

会長

来月以降、新たに高校再編の審議会が立ち上がるということなので、そこでまた検討されるであろうと思う。

委員

現状維持に賛成である。一部修正をしながら現状維持をしていく。撤廃ということになると、一極集中とか学力の問題とかクラブ活動の問題等、いろんな問題が出てくる。中学校側の問題もある。現状で考えるのであるならば、いろいろな問題を部分修正して行って、大枠では現状維持でいく方がいい。

委員

飯南高校は、生徒募集や特色ある学校づくりということで、学校も生徒も地域も大変な努力をしている。10数年前、硬式野球部をつくらうという話が出て、こんな学校じゃ無理だとか、何とか資金は地域で集めるのでとかいうことでできたという経緯もある。かつては旧赤来町、頓原町から1,500万いただいていたが、合併のため以前のようなお金は出せないということで、地域の皆さんに声かけをして資金援助のお願いをしたりしている。

松江市で大幅な緩和がされて一番近い高校へ行けなくなると、山間地の学校へ呼べるのではないかと考えている。大幅緩和という方向も、我が地域にとってはいいことではないかと思っている。

会長

大方の委員の意見は現状維持という方向ではないか。その中で一部、緩和の条件として何か出せばいいのではないか。四中、津田、竹矢に対する配慮という点でも何か出せたらいいと思っている。

島根大学教育学部卒業生の教員採用率がワーストワンだということで取材を受けたりするが、島根県内の採用数はきわめて少ない。県外にまでチャレンジしていけば合格する確率は高いと思うが、島根県の小・中学校や高校の先生方や保護者とか地域が地元志向だし、なか

なか県外に出ていかないという学生の気風もあって、苦労しているところがある。そういったことについてもちょっと風穴があげられればうれしいと思う。

〔休 憩〕

会 長

この審議会として、松江3校普通科の取り扱いについては、現状維持という方向のもとに一部緩和という条件をつけることで意見の一致を見た。その緩和の方向とか条件としてはどのようなことが考えられるか。

委 員

松江の場合、入試の第2志望のシステムはどうなっているか。

事務局

1回の出願で第2志望校まで書ける形になっている。改めて第2志望校について受験があるわけではなくて、1回の試験で2つの学校を志望できる。

松江市内の高校への進学を希望する松江市の生徒は、例えば第1志望校を松江東高校、第2希望を松江工業というような形で、普通高校と専門高校を第1希望、第2希望という形で出すことはできるが、例えば松江東高を第1志望にして、第2志望を松江南高ということではできない。普通高校と専門高校で一つ線を区切り、普通高校の中から自分の住んでいる居住地のところの普通高校を1つと、線が引かれていない専門高校の中から1つ書くというようなことに現在はなっている。

委 員

松江市内の場合は、3校が居住地によってきちんと分かれているので、第1希望を松江北高校、第2志望を南高ということができなくて、第1志望松江北高校、普通高校へ行きたかったら平田高校を第2志望だとか、安来高校を第2志望とか、大東高校を第2志望という形になる。あるいは、松江市内にいたいということなら、第1志望を北高校、第2志望を商業高校とか、第1志望を北高、第2志望を松江女子高校というパターンもある。

委 員

北と南しかなかったときは、いわゆるボーダーラインのところを、何%か北高志望者と南高志望者とまぜて上からとっていくというようなことをしていたが、今はそういうことはないのか。

事務局

そういった調整は行っていない。

委 員

8%の枠をもう少し拡大をするようにしていただきたい。また、さきほどの市内の2つの普通高校が志望できないという問題についても緩和ができないかという感じはする。

委員

3校がやってきたことの弱点としては、やはり3校が争うことによって、実績至上主義というか、子供の希望で勝負させないというようなこともあった。

小中学校の教員を見ていると、一つ一つの学力到達度に対する認識が甘くなっていると感じることもある。宿題の出し方一つとってみても、3で終わってそれでよしとする教員と、6までやらないと自分の責任が果たせてないと思う教員がいる。昔の方が厳しかった。そういう意味で、少しカンフル剤を打つ必要があるという思いでいた。

松江の問題についても、いきなり撤廃すると大混乱を起こす可能性がある。しかし、地域の保護者の不満を解消することはぜひやらないといけないし、学力という面で少し緊張感を持つという視点から自由枠を設けるのはどうか。

地域外枠の8%を、松江市内も合わせて15%とか10%に増やす。その時、あまり大きな問題が起きない範囲の数字は一体どれくらいなのか。そこら辺に規制緩和の方向性があるのではないかと。松江市内に、隠岐、雲南、安来という地域外を含めて各学校20%とすることになると、たとえば安来から大挙して来るとかという事態が起きて、結局松江市内の高校のレベルは下がらないという可能性もあるのではないかと。今は8%だから、たとえば隠岐から来る子も制限されてきたが、市内の3校の制限枠が広がるともっと松江に集中してくる。そうすると、松江の周辺の高校がどうなるかという問題も絡んでくる。緩和という方向が、地域だけで終わるのか、学力問題を加味した競争原理というところまでいくのか、どちらかがこの会の一つの焦点になっていくだろうと思う。

もう一つ、理数科をどのようにするのが一つのポイントになる。例えば普通科は今までどおりだが、理数科は御自由というような方法もある。そうすると、ある程度市内の子供の選択の幅が広がるということもあって、恐らく最終的には理数科の問題と絡んでくるのではないかと。

会長

少し理数科に絞って話をしていきたい。現在の状況や問題点を整理しておきたいので、事務局の方から説明してほしい。

事務局

理数科については東西2学区になっている。既に東西2学区については撤廃という方向を出してもらっているが、東西2学区で東から西へ、西から東へ行く場合は定員の5%以内というのが、北、南に限らずすべての理数科に関する規定である。5%というのは、どこのクラスも1学級40名なので2名ということになる。松江の場合は東に含まれるので、西からは現在は2名以内。ただ、東のいわゆる出雲部からは自由に受けることができる。

ただし、旧松江市内については、橋北、橋南で通学区域を定めているので、橋北は北高の理数科、橋南であれば南高の理数科ということになる。だから、新しく松江市になった旧八束郡に住む生徒たちは、北、南どちらの理数科も受けることができるが、もとの松江市に住む生徒は片方しか受けられない。そういう矛盾が出てきている。

会長

旧宍道町、旧玉湯町、旧八雲から北高理数科への希望状況はどうなっているか。近いから

南高の理数科へ行くのか、どうなのか。

事務局

多くは、旧八束郡を含めて、橋の北が北高の理数科で橋の南が南高の理数科という動きである。ただ、一部、玉湯、宍道あるいは東出雲の方から北高の理数科へ入ってる子もいる。逆は余りない。ここ3年間ぐらいで言うと、年間二、三名から多いときで五名ぐらいである。

委員

松江の方は、普通科の方は基本的に維持ということもあるので、選択幅を拡大するという観点から理数科はどちらでも受けられるというふうにしてもいいのではないかと。理数科は特別のものということもあるし、市町村合併のこともあるから、理数科はどちらでも受けられるぐらいの選択拡大をしてもいいのではないかと。

委員

理数科の近年の志願者動向はわかるか。

事務局

2校の理数科について言うと、松江北高校の昨年度までの倍率が1.30、1.38、1.15、1.35、1.40、高校全体の志願倍率が平均大体1倍であることを考慮すると、相当に高い倍率になっている。南高校について見てみると、1.08、1.03、1.03、0.95、1.00と、1、2名オーバーしているか、1、2名切ったかというような状況である。

委員

ことしの北高の理数科は40人の定員に対して50名で、倍率は1.25。南高の理数科は40名の定員に対して49名で倍率は1.23になっている。

委員

合併して同じ松江市民になっているにもかかわらず、旧市内は行きたい理数科に行かれないのに例えば旧八束が行かれるというのは、何のために合併をして同じ松江市民になったのかということになるのではないかと。旧松江と一緒に形にしていただけならと思う。だから、たとえば宍道町の人、もう橋南に住んでるという感覚で南高の方に来ていただくのが、保護者間では説明がしやすい。いつまでたっても旧松江、旧八束という話になるのはどうかと思う。

委員

宍道などの旧市外と旧松江市内のいわゆる橋南は同じレベルにしないと理屈が立たないと思う。もう一つ言うと、普通科の議論の中で話に出た3校が均等な形で切磋琢磨していくというスタンスであるならば、理数科も同じにした方が筋が通るのではないかと。

会長

大橋川で分けるときに、旧八束の方で北高に行けたところからの不満が出るだろうか。

委員

この会の流れとして、現状維持ではあるけれど風穴をあけようということやってきた。ところが、この理数科については、玉湯と八雲と宍道、そして東出雲については今まで自由であったものが制限が加わることになる。そのところが難しい。全体が緩和の方向に進んでいるところへ、そこだけは逆に制限をかけるという説明が難しい。

委員

東高には理数科がないというような現状をかんがみて、理数科は南北どちらを受けてもいいという形にしてはどうか。旧八束郡の町村からはどちらを受けてもよかったわけで、それに旧松江市内もあわせるという格好にしてはどうか。

委員

松江市の立場で言えば、橋南と橋北で分けると、旧松江市外の子どもは合併したがゆえに行きたい学校の理数科行けなくなることになる。今まで可能だったものが不可能になったというのは説明がしにくい。

委員

東高に理数科がない以上、等質等量という原則はもう既に崩れている。そうすると、等質等量という原則をどこまでも守るというのも無理がある。撤廃した方がいいと思う理由は、理数科は特別な学科だからだ。普通科については、その地域の中学校にとっては死命を制するものだから学区制を守っていく。しかし、専門高校はどこからでも自由に行くわけだから、理数科も似たような性格のものと考えて撤廃するのがいい。

将来的にどこか中高一貫校ができれば、学区が大きく変わってくる可能性がある。そういう意味で、理数科も撤廃したときにいろいろ変わってくる危険性はある。だが、それはまた戻せるものでもある。三刀屋の総合学科も全県1区であるし、特別な学科については、それぞれ特色をつけて頑張らせることも必要ではないか。そういう視点で理数科は撤廃して、自由にお互い競争させるというのも一つの方法ではないか。

委員

子どもたちの中で理数科と普通科の違いはあまり意識されていない。そういう感覚でいる者にとってみれば、普通科の場合は現状維持で北高に行けないのに、理数科だけは自由になったというのは矛盾というか、複雑な感じがする。

委員

今、高専が大変人気がある。松江一中だけで考えると、北高の理数科へ行くよりも、高専へ向かう子どもが多い。人数だけでいうと40人ぐらい受ける。高専との兼ね合いといったことも考えておかないといけないのではないか。

委員

かつて理数科に入っても2年生ぐらいで行き詰まる子が出た。理系だといって理数科に入ったが、数学や理科が行き詰まって登校拒否になるとか。そこで、途中で理系に限界を生じた者は文系用の授業を受けさせるという救済方法をつくった。そのことが文系も理系も行けるし全県1区ということで、人気が集まっている現状である。

委員

大田からは理数科に来られるけれども、松江の子どもはあそこの理数科入れないという問題が出てくるということが一つ。もう1点は、選択肢はやっぱり多い方がいいだろうということ。そして、その中での競争というのも大切じゃないかと思う。

委員

高専は非常に実践力があって注目されている。専攻科を中心にいろんな研究をやったり、途中から四大の方へ編入したりして、特殊な教育をしている。理数科も、英才教育というねらいでやるのであれば、規制は撤廃してとにかく優秀な子供たちを集めてその設置目的に合った教育をしていくのがいいのではないか。

会長

今のような方向での結論を出したときに南高の理数科はどうなのか。先ほど普通科については入試のことを聞いたが、理数科との絡みではどうなっているか。

事務局

第1志望校として北高の理数科と書いて、第2志望校として東高の普通科と書くということになる。それともう一つ、第2志望校として別の学校が書けるという形をとっており、そこで調整を図っている。

会長

以上で本日の審議を終えたい。この委員会としては、松江3校の普通科の通学区域のあり方については、基本的に現状維持ということであるが、その維持のあり方としては、緩和の方向で、いろんな視点や方法、手法を考えながら進めていきたい。

2つ目の松江2校の理数科の通学区域のあり方については、本日のところで結論を出すことは避けて、次回に回したい。

事務局挨拶

教育監

第5回目の検討委員会を開催したところ、委員の皆さん方には公私とも大変お忙しい中を出席していただいた。そして、昼食時間を挟み4時間という時間議論していただいた。お昼を食べながらも、いろいろ話し合いをしていただいたわけだが、終始熱心な御協議をいただいたことに感謝したい。

第6回、第7回と、本年度末に実施する予定である。今後とも引き続いてよろしく願いたい。

